

# 国内外の「陽明学」になぜ温度差があるのか

銭 明（山路 裕 訳）

近年、陽明学が中国大陸で急速に熱を帯びている現象と鮮明な対比をなしているのは、国際的、とりわけ我が国周辺でかつて「陽明学熱」のあった国家と地区とで、かえって日に日に冷めてきている状況が見られることである。この現象は、王陽明生誕 500 周年と 550 周年の記念活動をめぐる国内国外の対応の温度差から、その一端を窺うことができる。

1972 年は王陽明生誕 500 周年であったが、中国大陸はまさに「文革」動乱のさなかにあつたため、王陽明もまた「大批判」の対象であった。だから、いかなる記念活動や学術シンポジウムも挙行できずにいた。しかし、日本やアメリカなどの国においては、大規模で影響力のある記念活動と学術シンポジウムが催された。

まず日本をみてみよう。日本の「陽明学熱」は、幕末維新期にはじまって戦後の昭和期まで続くが、とりわけ 1972 年にピークを迎える。この年は、王陽明生誕 500 周年を記念して、日本の学界とビジネス界は様々な記念活動を挙行したほか、重要な研究プロジェクトを開始した。それは、1974 年に出版された、宇野哲人・安岡正篤監修、荒木見悟・山下龍二・岡田武彦・山井涌ら編纂の『陽明学大系』十二巻、さらに別巻の『伝習録諸注集成』を加えた叢書であり、この記念事業の最も優れた成果である。この叢書の出版は、日本の陽明学研究と伝播をもう一度最高潮に押し上げただけでなく、さらに国際陽明学の研究と伝播に対しても深い影響を及ぼした。その価値は今に至るまで減びていない。

次にアメリカをみてみよう。1972年、王陽明生誕500周年を記念して、アメリカアジア学会が、3月28日にニューヨークのウォルドーフ・アストリアホテルで大会を挙行し、王陽明生誕500周年を記念する座談会が設けられた。座談会は陳栄捷が司会をつとめ、討論の参加者には、コロンビア大学のドバリー（William Theodore de Bary）、スタンフォード大学のデイビッド・シェパード・ニヴィソン（David S. Nivison）などがいた。さらに6月14日には、アメリカのハワイ大学哲学系が、歴史的に非常に意義のある「王陽明学術シンポジウム」をホノルルで挙行した。アメリカ・ヨーロッパ・日本、および中国の港台地区の新儒家の著名な学者として、陳栄捷・ドバリー・岡田武彦・成中英・方東美・牟宗三・杜維明らがこの研究会に出席した。

さて、2022年は王陽明生誕550周年の年にあたる。新型コロナウイルスに対して厳重な対策を施したうえで、中国大陸各地では以前同様に様々な記念活動を挙行し、活気にあふれた。これに比べると国際社会、とりわけ中国近隣国ではかえって異常なほど活気にとぼしく、50年前と比べると全く様相を異にする。韓国陽明学会、および我が国の港台地区では記念活動はまだ挙行されておらず、日本ではただ二松学舎大学陽明学研究センターだけが、2022年9月17日に「近代日本の学術と陽明学」を主題とする学術シンポジウムを挙行した。

シンポジウムは、2022年に二松学舎大学陽明学研究センター長に就任したばかりの牧角悦子教授の司会のもと、東京大学教授の小島毅が「陽明学は右か左か」の基調講演を行った。会議は三つの部に分かれた。第一部のテーマは「陽明学研究の現在」と題し、司会者は二松学舎大学非常勤講師の中根公雄、発表者とその題目は、二松学舎大学大学院生・山路裕の「定理と「心」——規範の遵守と実践の多様性」、早稲田大学・原信太郎の「山田方谷における誠意説の基盤」と早稲田大学・大場一央の「陽明学研究におけるテーマ性について」である。第二部のテーマは「幕末から近代の陽

明学」と題し、司会者は二松学舎大学専任講師の和久希、発表者とその題目は、東京音楽大学・山村奨の「井上哲次郎以前の「近代日本の陽明学」、常磐大学・松崎哲之の「水戸学における尊王攘夷について」と早稲田大学・永富青地の「安岡正篤の陽明学理解について」である。第三部のテーマは「近代の学術制度と陽明学」と題し、司会者は二松学舎大学教授の牧角悦子、発表者とその題目は、二松学舎大学大学院生・鈴置拓也の「二松学舎をめぐる陽明学—創立から現在まで」、二松学舎大学・今井悠人の「陽明学関連資料データベースの構築について」と九州大学・藤井倫明の「九州大学における陽明学研究：回顧と展望」である。最後は「総合討論」が行われ、司会は二松学舎大学の町泉寿郎がつとめた。このシンポジウムは二松学舎大学を主とするが、基本的には同大学陽明学研究センター内の討論会に属するものであることがわかる。

10月31日の王陽明生誕の日になると、日本在住の華僑である京都中国書画院理事長・謝春林ら在住の中国人たちが、滋賀県高島市安曇川町上小川にある中江藤樹記念館内の「陽明園」で、小規模ながら記念活動を行った。同園は、中国の余姚市と日本の安曇川町が両地の文化交流を強化するために、1990年代に建てられた中国式庭園である。ここでは小規模な記念活動が行われただけであるが、それは中日両国が代々にわたって睦まじくあれと望む、在日華僑と日本の友好的な人々の気持ちを反映するものなのである。

ひるがえって、これ以前の3月18日から22日にかけて、アメリカのプリンストン大学哲学系は、“Wang Yangming and Ming Thought (王陽明と明代思想)”と題した国際的な学術シンポジウムを挙行了した。オンラインと対面の開催で、異なる学科とバックグラウンドの四十数名の学者が参会した。発表・講演者には、ウェズリアン大学教授ステファン・エンジェル (Stephen Angle)、ハーバード大学教授ピーター・ボル (Peter Bol)、ロンドン大学仏教研究センター副研究員ジェニファー・アイヒマン (Jennifer Eichman)、マカレスター大学副教授ハンドラー・スピッツ (Rivi Handler-Spitz)、ジョ

ージタウン大学教授アイヴァンホー（Philip J Ivanhoe）、ロンドン政治経済学院教授李蕾（Leigh K.Jenco）、プリンストン大学助理教授ハーベイ・レダーマン（Harvey Lederman）、台湾中央研究院研究員林月恵、浙江大学教授彭国翔、復旦大学教授呉震らがいた。議論の範囲も広範で、明代哲学・歴史・宗教・文学、および明と同時期のヨーロッパ文化の比較にまで涉った。

50年は、歴史という長河の中においては一瞬の間に過ぎない。しかし「陽明学」が国内外でかくも顕著なコントラストをなすその原因を突き詰めてみれば、主要なものとして以下のいくつかの理由が挙げられるだろう。一つ目は、東アジア社会の転換期が出現する時期に差があったことと一定の関係があること。二つ目は、中国の国力が急速に増強していることと必然的な関係があること。三つ目は、国家間の政治的関係性の急激な変化と密接な関係があること。当然、これらはただマクロな趨勢からみたものにすぎず、もしミクロ的にみるならば、人文科学が日本などの国では衰滅していることとなにかしらの関係があるとともに、国際社会において人文系学科の関心が、現在の中国政治・経済・社会の研究に向かっていることと緊密な関係がある。

この現象は、ある意味で我々に大きな気づきを与えてくれる。すなわち、中国の故事をよく講じ、中国文化をしっかりと伝える際に、結局どのようなやり方を取り、どの道を通り、どのような態度によって実行し、推進していくべきかということである。これらはいずれも、歴史的な経験を総括する基礎に立って真摯に反省を進めていく必要がある。ひとりよがり自分だけが楽しみ、やみくもに自分を過信し、さらには虚勢をはって夜郎自大になってはいけないのだ。人数や地理的な強み、または資金的な優勢によって形式主義に陥って、「重大工程（基盤研究）」を獲得するようなやりかたは、文化の「走出去（対外投資）」発展戦略を実現し、また中国の「ソフトパワー」が生み出す効果を高めることによって、人に疑問を持たせ人を危惧させるものなのである。

【付記】

錢明先生は現在の中国における陽明学研究の第一人者である。長く浙江国際陽明学研究所所長をお務めの後、現在は 浙江省稽山王陽明研究院副院長として、中国における陽明学関連行事のかなめ的な役割を担っておられる。日本との繋がりも深く、九州大学で文学博士（中国哲学）を取得して以来、日本の研究者と広く交友を結んでいる。本研究所とも、『陽明学』への依頼論考、特別寄稿のみならず、国際シンポジウムを通じてたびたび研究交流を継続してこられた。

昨年度、本研究センターで出版した雑誌『陽明学』別冊『近代日本の学術と陽明学』において中国の現状をご紹介いただいたが、その後、この研究所の取り組みを中国の雑誌に紹介してくださった。その一文を、ここに訳出して転載する。

その意図としては、もちろん日本における本研究センターの取り組みを、本国（中国）に広く喧伝してくださった、ということもあるが、しかしそれ以上に、現在の世界的な人文学衰退への警鐘を、中国における陽明学チームの白熱の最中から発信されている、その研究者としての良識に共鳴するからである。陽明学研究という、ある意味で夾雑物を抱え込みやすい学問分野を歩む者への、洞察に満ちた提言として、本誌に掲げる所以である。

牧角 悦子（陽明学研究センター長）